大学における教養教育を考える（その１）
－「現代社会と人Ａ・Ｂ」の授業実践の検討を通して―

小沢一仁[*1]　木村瑞生[*2]　山本正彦[*3]　植野義明[*4]

A Review of Liberal Arts Education at a University level through an Omnibus Lecture series “Modern Society and People A & B” (Part 1)

Kazuhito Ozawa[*1] Mizuo Kimura[*2] Masahiko Yamamoto[*3] Yoshiaki Ueno[*4]

The purpose of this paper is to review Liberal Arts Education at a University level through an Omnibus Lecture series “Modern Society and People A & B” which we offer at Tokyo Polytechnic University. This lecture series is offered to inspire students to have ability and skills to live in a contemporary society. Ozawa overviews this lecture series help students to discover connections between modern society and their research areas in Chapter 1. The following chapters introduce lectures by Kimura and Yamamoto, respectively. They focus 1) the connection between modern society and students’ research areas, 2) responses from students, and 3) educational effects. As Kimura gives lectures to have students raise their motivations, many students submitted reports on concepts of motivation. He concludes that students’ feedbacks have improved this lecture series since it started. Yamamoto discusses the way to convey the fun of running to students. His lecture consists of four parts: differences of running between animals and human beings, running in evolution, running effect to human body, and the condition of human body after running. After his lecture, the number of students who express ‘I want to run’ or ‘Running is necessary for us’ increased. Chapter 4 illustrates Ueno’s lecture. He asked the students what had happened if the Tensho embassy had brought back Euclid’s “Element” to Japan. This is an exercise of imagination in the cultural study of mathematics. One of the students’ reports clearly shows that the cultural dimension of mathematics is invisible to our students.

はじめに

大学における教養教育はいかにあるべきか。「現代社会と人Ａ・Ｂ」という教養科目（本学では人間科学科目とされる）における授業実践を通して、教養教育のあり方を検討することを目指すものである。本論は「大学における教養教育を考える（その１）」と題し、第１章で「現代社会と人Ａ・Ｂ」の概要と目的について検討する。第２章以降では、「現代社会と人Ａ・Ｂ」における授業実践をそれぞれの担当者が提示する。続く「大学における教養教育を考える（その２）」においては、第１章以降で引き続きそれぞれの担当者の授業実践を提示する。終章では、それぞれの授業実践を振り返り、「現代社会と人Ａ・Ｂ」の教育効果と意義を考察する。最後にまとめとして、「現代社会と人Ａ・Ｂ」の授業実践を通して、大学の教養教育のあり方を議論する。

第１章「現代社会と人Ａ・Ｂ」について
（担当：小沢一仁）

１．「現代社会と人Ａ・Ｂ」の概要について

「現代社会と人Ａ・Ｂ」は、一般教養、いわゆる教養科目にあたる、本学においては人間科学科目と

*1　東京工芸大学工学部基礎教育研究センター准教授　第１章担当
*2　東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授　第２章担当
*3　東京工芸大学工学部基礎教育研究センター助教　第３章担当
*4　東京工芸大学工学部基礎教育研究センター准教授　第４章担当
2010 年 9 月 16 日 受理

命名されている科目群のひとつとして2004年度に開設された科目である。

大学における教養科目は、大綱化による削減を経て、現在では教養教育の重要性が指摘されている。この流れを受けて、教養教育の新たなる試みとして開設されたものが「現代社会と人Ａ・Ｂ」である。

本授業の要点を挙げると、①それぞれの学問分野をもつ教員がそれぞれにテーマを個別に設定するオムニバス授業である。②それぞれの講義を担当する教員は、それぞれの学問分野と現代社会との接点からテーマを選ぶ。③授業の構成は、毎回ごと、講義(約60分)･質疑応答･小課題（約20分400字程度）とする。④本授業の目的は、受講者の学生が現代社会をいかに生きるのかについての理解を深めることを目指すものである。

２．「現代社会と人Ａ・Ｂ」の目的について

専門教育における専門科目であろうと、教養教育における教養科目であろうと、ある学問分野についての授業を学生が学ぶ目的は、その学問分野の内容を身につけることである。では、その先に何があるか。専門科目においては、その分野の専門的知識や技術を身につけて、専門家となることが目指される。では、教養科目においては何が目指されるのか。この問いを突き進めたところから、「現代社会と人Ａ・Ｂ」が開設されたのである。先に示したように、「現代社会と人Ａ・Ｂ」はそれぞれの学問分野をオムニバス授業で、それぞれの学問分野についての細切れの知識や技術を得ることを目的としているのではない。それぞれの学問分野と現代社会との接点の内容を提示することによって、学生が現代社会を生きるヒントを得ることが目指されているのである[1)2)3)]。ある学問分野について素人の学生が、その学問分野に入っていくという入門として学ぶのではなく、学生が現代社会の中でよりよく生きるために学問分野の内容を学ぶのである。つまり、ある学問分野の入門という目的から、ある学問分野の内容を通して現代社会をよりよく生きるという目的の転換がある。

３．「現代社会と人Ａ・Ｂ」の授業実践の検討について

それぞれの講義担当者から以下の手順において、それぞれの担当授業についての実践を提示する。このことによって、「現代社会と人Ａ・Ｂ」の目的である現代社会を生きる学生がよりよく生きることを目指すために教育的効果があったかどうかを検討する。

授業担当者が、下記項目を記述する。

①講義内容のアウトラインの提示

各授業担当者が、それぞれの学問分野と現代社会の接点をテーマとしてどのように講義したか、そのアウトラインを述べる。

②学生の反応の提示

「現代社会と人Ａ・Ｂ」においては、先に授業の構成で示したように、授業者側が講義して終わるのではなく、学生は毎回小課題として授業者が提示したテーマに沿って小論文を書くことが求められる。これは、学生自身が現代社会を生きていることを当事者意識を持って、自分のこととして自覚を促し、自分自身の考えを練っていくために導入された[1)2)]。または「Ａ」と「Ｂ」はそれぞれ1200字程度のレポート課題を2回課している。そこでは、学生が一つのテーマを自分の調べた資料と共に自分の考えを述べる。また、授業者は独自にアンケートを作成し、学生の反応を検証する試みも行う場合もある。

このような小課題、レポート課題、アンケートのいずれかにおいて、受講生の学生がいかに講義を受けとめていかに感じ思い考えたかを提示する。

③学生の反応に対する考察

取り上げられた学生の反応は、全体的傾向であれば、数例のケースもある。そこから、講義の教区的効果を考察し、学生に対する教育的効果を上げるにはどうしたらいいかを考察する。

また、担当した授業から教養教育についてそれぞれの専門分野の立場から、教養教育をどう行っていったらいいかについて提言を行う。

第２章　やる気を生み出す脳のメカニズム　（担当：木村瑞生）

１．講義の内容

最近の学生の“やる気”の低下は、学力の低下より教育上大きな問題を招いている。学生に何かを教

えようとしても、それ以前に“やる気”が無いということでは、いくら授業内容を工夫しても無意味なことになってしまう。このような学生が増えてきている現状を考えると、学業に関連するような授業工夫に力を注ぐ前に、人間としてもっと根源的な“欲”を高める教育的な工夫をした方が望ましいのではないかと思われる。この“やる気”の問題は、教師側から学生をみた場合だけでは無いようである。実は、学生自身も自己の内面から“やる気”が湧いてこないことに悩んでいるように感じ取られる。このことは、学生から提出された小課題（レポート）から分かったことである。

そこで、本授業では“やる気”の根源ともいうべき“欲”がどのような脳の働きによって生まれるのかを講じ、学生自身に“やる気”について考えさせることを授業の目的としている。

講義の時期が、ゴールデンウィーク明けの５月中旬ということもあり、日本人の多くが「５月病」という“やる気”の低下を招く時期と重なる。そのため、講義の皮切りは、新聞記事の「５月病」や最近の「ニート問題」を取り上げることにしている。ここでは、“やる気”の低下や喪失は誰にでも起こる身近な出来事であることを説明する。次に、どうすれば“やる気”が醸し出されるかという脳内機構について説明し、その脳内機構を活性化する方法論について、新聞記事等[4)5)6)]の例を提示している。その方法は意外に当たり前なこと、誰にでもできることで“やる気”が醸し出されることを説明して講義を終える。

講義終了後には学生に本講義の主題である“やる気について”というテーマで小課題（レポート）を提出してもらう。

以下に本学学生の小課題から抜粋した６例を紹介する。文章表現については、学生の記述を出来る限り尊重した。

尚、例１～６のタイトルは、著者の独断によって付けたものであることをご了承願いたい。

２．体験に基づいた小課題の例

例１　半ニート的生活からの脱出（４年、男子学生）

私は以前、最もニートに近い学生であったと思われる。私の生活は昼夜逆転していた。

＜中略＞　昼過ぎに起床、もちろん午前の授業はさぼり、その後だらだら過ごして２時頃家を出発、適当に授業（４,５時限目）を受講する。このような生活を半期の間行っていたら、１日が過ぎるのがとても早く、なにをしても無気力・無感動であり、「やる気」というものは皆無であった。

まず、家に帰るとネット・夕食・ゲーム・ネットで朝方に就寝であった。当然、このような生活をしていた半期間に取得した単位数は１ケタ台であり、留年にもっとも近い状況にあった。

その後、私は「半ニート生活」とこの後の人生に危機感を抱き「やる気」を出すことにした。**まず規則正しい生活スタイルと３食しっかり食べ、適度に運動することとした。規則的な生活で、何故か「やる気」が出てきた。**それだけではなく身体の調子も良くなった。

＜中略＞　また、授業面においては、今まで「ノートはとらない、課題はださない」であったが、規則正しい生活により、「ノートはしっかりとる、課題は出す」に変わった。　以下省略

例２　やる気を生み出す手帳　（４年、男子学生）

私は１年留年してしまいました。１回目の４年生の時、１年間がんばれば卒業できる段階にいたにも関わらず、もう無理だ、学校に行くのも億劫だと感じてしまい、なにも「やる気」が出ず、外出もあまりせずニートになり、何も生産されない空白の１年間を過ごしてしまいました。この生活は、脳を委縮させ、のどが閉じ、人と話をすることが出来なくなると感じました。このままだと自分は人間では無くなると思い、「やる気」を出し親にもう１年スネをかじらせて下さいとお願いし、今こうして大学の授業を受けています。この授業を聞いて、生活リズムについて“朝太陽をあびることは１日の「やる気」を出す”ということを実感しています。私は寝る前、部屋の電気を消した後、カーテンを開け、朝目覚めるときにちょうど太陽の光が当たるようにしています。朝太陽をあびることで目覚めも良く、１日の「やる気」のスタートがきっちり取れ、その日１日充実して過ごせることが多いです。**もう１つ「やる気」を出すのに手帳をいつも持ち歩くようにしている。明日のやる事を書いたり、今日の出来事を書くことで小さな目標をもち、そのため「やる気」が出る気がしています。**

例３　太った？その言葉が変えた（４年、男子学生）

私は夏に向けてトレーニングをかかさず行っている。これを始めたのは４月頃からだが、それまでは、ゲームや二度寝と悪循環の中で生活をしていた。ある日、**友人から「太った？」と言われショックを受け、夏までに５ｋｇ痩せる！と目標をたてた。**＜中略＞　**「太った」と言われ私の中で危機感を感じたのでしょうか、今まで全くやらなかったトレーニングを始めました。そして、この時の私は何にでも一生懸命になれました。トレーニングはもちろん、勉強、仕事にめりはりがつくようになりました。**これは授業で聞いた「運動で脳も体力向上」だと思いました。

＜中略＞　さらに別のことでも私の体に変化が起きていました。なにかというとイライラしがちな私は、ストレスの発散ができずに友人にイラダチを向けてしまうことがありましたが、（トレーニングをするようになってから）よく考え行動できるようになりました。

例４　プレッシャー　　（４年、女子学生）

私は毎年この時期になるとやる気がでず、学校にも行かないで家に引きこもることが多かったです。これは５月病だったんだと思いました。ご飯もろくに食べないし、動かないし、長時間起きていることもなく、何に対してもやる気が起きませんでした。しかし、今年は５月病にならず、しっかり学校に来ています。それは、卒業がかかっているからです。１、２、３年の頃にちゃんと単位を取っていなかったため、学校に来ざるを得なくなったのです。学校に通えるのは親が授業料を払ってくれるからであって、留年してしまったらまたお金がかかってしまいます。**そんなプレッシャーから私はやる気を出し、学校に週６で通っています。**こんなことになるなら１、２年生のときにしっかり学校に行っていればよかったと後悔しました。しかし、切羽詰まらないとやる気がでない性格のため、今現在、４年生になってやっと真面目に勉強に励み始めました。無事卒業できたとき、また何に対してもやる気が出なくなってニートになりそうで不安です。

例５　友人の親に対する失望　（２年次、女子学生）

突然だが、友人にニートがいる。彼女とは高校が同じだったのだが、「別に何にもなりたくない」という理由で受験も就職活動もしなかった。私は何度かその親に相談を受けた。「あの子は本当に可愛そうなの、なんとかしてあげて」私は、この親にしてこの子ありだなと思った。一緒になんとかしようではなく完全に投げている。夕食は（家族の）人数分作られるのだが、友人は食べずに「出前の方がおいしい」と言って出前をとる。家族は文句を言いつつお金を払う・・・。彼女は今もそういった生活をしているし、家族は彼女にかかるお金（月２万を越える携帯代だってそうだ）を払い続けている。いつか彼女の「病気」が治ってくれると思って・・・。こういった図式は本当におかしいと思う。**可愛そうという勝手な思い込みによって一人の人間をつぶしていることに気づいていない。私たちはこういった親をどうしたらいいのだろう？**私はこの人達と関わることに疲れてしまった。

例６　おとうさんの力　　（1 年次、女子学生）

私も過去丸１年ニートでやる気の出ない生活をしていました。自分をダメ人間、日本のゴミとかってあきらめていたので、何もする気が起きなかったし、それを親が許していたのでそのままズルズル“ニート”やってました。けど、先生が例にあげていた「自分で何かをやろうとして達成出来た時」や「親にほめられた時」などはやる気が出ます。

＜中略＞　**私がニートだった時にお父さんに「勉強が嫌いならしなくてよいからせめて運動しろ。心までダメになってしまう」って言われて、お父さんが昼休みに帰ったときに一緒に歩いたりしました。**

＜中略＞　外に出た時と家にいて何もしない日では１日の過ごし方が全く違うし、やる気も違った。

３．考察

例年、学生から提出された小課題の中に著者の興味を引くものが数例存在する。その中には４年生から提出された小課題が多い。彼らのこれまでの大学生活の中で“やる気”を喪失した実体験の記述が著者の目を引いた結果である。彼らの小課題については、身近な出来事で説得力のある内容が記述されているので、講義の際に学生に紹介している。受講生

は、この時だけは眠らずに聴講している。

このように、数年にわたる「現代社会と人Ａ」の講義を通して、学生から提出された小課題（レポート）によって本講義の重みがやっと出てきたのではないかと感じている。

第 3 章　人はなぜ走るのか
（担当：山本正彦）

１．目的

昨今、ランニングへの関心が高まっている。SSF 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2008 によれば､週 2 回以上走っているランニング愛好者は、推定で 248 万人いるとされている（笹川財団ホームページを参照。http://www.ssf.or.jp/）。スポーツ種目別では 6 番目に多い結果である。これは、今日ランニングがブームであることを反映した結果と考えられよう。

その一方で、教育現場ではランニングを題材にした授業は少ない。走ることを取り上げた授業があっても、陸上競技の短距離走や長距離走として扱う場合が多く、かつ競争的なものとなっている。

そこで本研究は、「人はなぜ走るのか」と題した講義において、ランニングの面白さをどのように伝えていくのか、その資料を得ることを目的に検討した。

２．本学学生は、走ることが好きか？

本学学生の、ランニングに対する意識はどうであろうか。授業に先立ちアンケートを実施し、「走ることは好きか？」「走ることは得意か？」について質問した。対象は出席した学生 49 名である。アンケートは、授業前に「走ることが好きか」「走ることは得意か」、授業前後に「走ってみたいと思うか」「走ることは必要と思うか」とした（後者は後の章で考察）。

「走ることが好きか」について､「好きである」「やや好きである」は 43%（それぞれ 16%、27%）､「嫌いである」と「やや嫌いである」が 32%（それぞれ 18%、14%）､「どちらでもない」が 25%で、走ることが好きである学生が多い結果であった（図 1）。

また「走ることが得意か？」について、「得意である」「やや得意である」は 30%（それぞれ 10%、20%）､「苦手である」と「やや苦手である」が 41%（それぞれ 27%、14%）､「どちらでもない」が 25%で、走ることを苦手にしている学生が多い結果であった（図 2）。

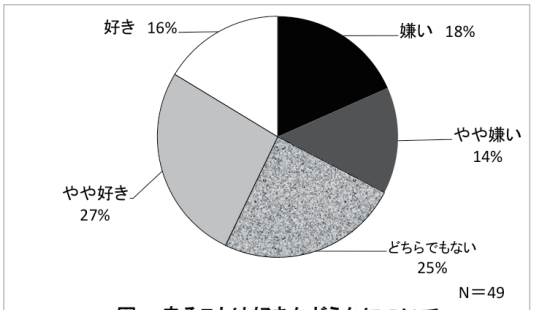

図1 走ることは好きかどうかについて

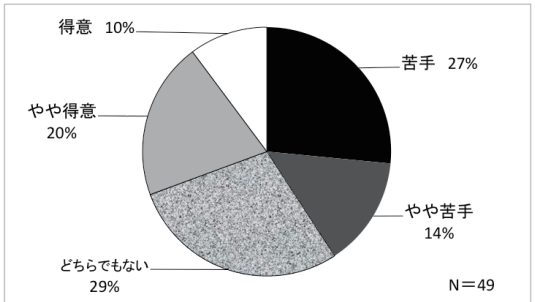

図2 走ることは得意であるかどうかについて

ランニングの得意不得意は、速く走ることができるかどうかの、ランニングパフォーマンスの高さによるものと考えられる。今回、走ることの得意不得意に関わらず、走ることが好きと回答している割合が多いことは、多くの学生がランニングに関心を持っている結果であろう。

３．授業内容

「人はなぜ走るのか」。その理由は、競技としてランニングが存在していること、ランニングは心身に好影響をもたらすこと等の解釈が指摘できる。しかしすべてのランナーの走る理由として、それらが当てはまるわけではない。

そこで授業は、4 つのテーマから講義を進めた。人が走ることの理由を考える機会を提供した。テーマは、1）～ 3）を客観的な話題、4）を主観的な話題とした。講義後の小課題は、「講義の中からキーワードを見つけ、人はなぜ走るのか論じる」ことと感想を記述させた。

４つのテーマとその概要は次の通りであった。

1）走ることに関する動物と人の比較

走行スピードの違いを、短距離走と長距離走で動物と人とを比較した。

2）サルからヒトへの進化におけるランニング

サルからヒトへの進化の過程で、なぜ立ち上がり、歩き、走ったのか概観した。

3）走ることで得るからだの喜び

ランニングが身体等にどう影響するのか概観した。

4）走った先にあるもの

マラソンをゴールしたランナーたちのコメントを紹介し、トライアスロン（アイアンマンレース）のゴールシーンを視聴した。

４．授業前後の走ることへの意識変化

授業後の感想は、1）～ 3）の客観的なテーマより 4）の主観的なテーマに関する感想が多く見られた。そのうち、ランニングに対する積極的な感想を以下に示した。

「毎年箱根駅伝を見ていますが、次の箱根駅伝の見方が変わり、新しい発見ができそう」

「現在の科学技術の進歩により、走る意味や必要性がどこにあるのか考えた。（中略）走ることは、足の代わりになるもの（乗り物？）があっても、人間になくてはならないものだと思う」

「（トライアスロンのゴールシーンを見て）これからの人生が変わるかも知れない。自分に自信がもてるようになって、何でも挑戦したくなると思う」

「走りたい、走ると楽しいと思うような講義でした」

これらは走ることに興味を抱く記述である。一方、ランニング対して消極的な感想はみられなかった。

ところで、授業後にもアンケートを実施し、講義を聞いて「走ってみたいと思うか？」「走ることは必要と思うか？」について質問した。それぞれの質問に対する回答は、1：そうは思わない　2：あまりそう思わない　3：どちらでもない　4：そう思う　5：強くそう思う　から選択させた。集計は平均値（±標準偏差）を求め、図に示した（図 3）。

「走ってみたいか？」については、授業前は 2.4（±1.5）であったの対して、授業後は 3.1（±1.1）と、走りたいと思う学生が増加していた。授業後の感想からすると、主観的なテーマが情緒を刺激している影響と思われる。しかし、今回はその要因を明らかにするアンケートは行っていない。今後こうした要因を調査することが必要であろう。

「走ることは必要か？」については、授業前は 3.0（±1.2）であったの対して、授業後は 3.4（±0.9）と、走ることを必要と思う学生が増加していた。授業前の回答から、3.0（±1.2）と高値を示しており、走ることを含めた身体活動の効果を理解している学生が多くいた結果と思われる。

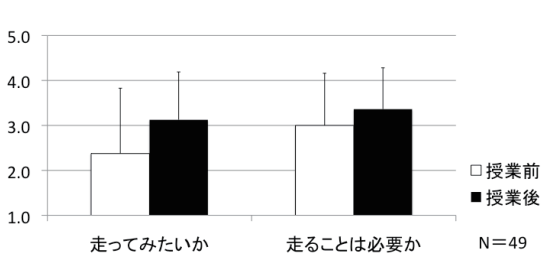

図3　授業前後における走ることに対する意識

Y軸は　1:そう思わない　2:あまりそう思わない　3.どちらでもない　4:ややそう思う　5:そう思う

５．まとめにかえて

今回、「ランニング」をテーマに講義形式の授業を実施した。授業後に、「走ってみたい」「走ることが必要」と考える学生が増えたことは、実技でなく講義でもランニングの面白さを伝えていくことが可能であることを示している。教育効果を高めるには、「走ってみたい」「走ることが必要」と思う学生に、ランニングを実践させることが重要である。ランニングを含め身体活動を題材にした場合、講義と実技を合わせて実施することが必要であろう。

第 4 章　天正遣欧少年使節と日本の数学
（担当：植野義明）

１．授業内容／講義の内容のアウトライン

この講義では、天正遣欧少年使節と日本の数学というテーマに沿って、プリントと画像で説明をし、この歴史上の事件が現代社会とどのように結び付くか考えてもらっている。天正遣欧少年使節は、1582 年（天正 10 年）に九州のキリシタン大名、大友宗麟・大村純忠・有馬晴信の名代として、ローマへ派遣された 4 名の少年を中心とした使節団であり、

高校の日本史の教科書にも必ず図像とともに載っている。しかし、使節が帰途につき、長崎に帰港するちょうど3年前の1587年7月 豊臣秀吉によるバテレン追放令発布から、信長、家康の時代を経て日本は鎖国の時代を迎え、使節が持ち帰った西洋文化が日本に根付くことはなかった。彼らが持ち帰った西洋文化として、グーテンベルグ印刷機による活版印刷、西洋楽器、海図が挙げられる。

２．学生の小課題またはレポート課題の紹介とそれに対する考察

学生が本テーマをレポート課題として取り上げることは非常に稀である。16世紀の歴史上の事件と現代社会とを結び付ける視点をもつこと自体がもともと難しいからであろう。2007年度にレポート課題として本テーマを選んだ学生が1名だけあった。ここではその学生のレポート課題を取り上げる。

この学生は「歴史にIFはあり得ないが、もし、ユークリッドの『原論』が16世紀の日本で印刷出版されていたら、日本はどのような歴史を歩んでいたか」という与えられたテーマに沿って、まず、印刷術と宗教の関係について次のように書いている。

「印刷機による本の大量出版は、識字率の高かった日本で急速に広まり、布教の早さはすさまじいものがあったのではないでしょうか。」

その結果、キリスト教が日本に広まると、今度は為政者にとっての脅威となるので、幕府は「日本古来からある神道と仏教の教えを広めるための本を作り出版」したり、「印刷技術を幕府が管理する」ようになり、その結果「キリスト教は、幕府の管理下に置かれるようになります。」と書いている。この学生は、このように宗教と政治の力関係について、歴史の授業で習った幕府の宗教政策や各地で起こった一揆などの知識を想起して、自分なりの仮想の歴史を自由に書くことを楽しんでいると思われる。

レポートの後半では、印刷技術の技術分野への影響について次のように述べている。

「さて、宗教に関しては以上のようになりましたが、その間、他の分野はどうでしょうか。出版技術により、口伝直伝でなければ教えることができなかった多くの技術が一般大衆の目に触れ、合間を見てはそれを発展させようと多くの人が話し合い、考えを述べたでしょう。」

つまり、宗教生活の豊かさだけでなく、技術の分野においても出版術はプラスの影響をもたらしたと論じている。これは出版が大衆向けメディアであるという本質をよくとらえていると言える。ただ、ここでも政府との対立は起こると論じている。

「勉強を自ら進んでやる人が増え、今まで産れによる身分社会だったものが瓦解しはじめ、それに不安を覚えた幕府は大きな集団を相手に戦争を開始しはじめ、結果として幕府が終わる時代が早まったでしょう。」

この文章は、印刷技術を契機とした技術発展によって、明治維新が市民革命の形で起こり、西洋型の近代社会は、黒船の外圧によるのではなく、日本社会の内部からの運動として起こったと論じているようにも受け取れる。

このようにifの歴史についていろいろ想像を逞しくして書いているが、レポートの結論部分では、次のように述べている。

「その後の日本の歴史は、現在のものと大差があるとは思えません。あるとすれば、日本の技術が今以上に高くなっていただろう事と、キリスト教の影響が少し強くなっていただろうということです。」

「宗教というのは、人々に強大な影響を与えますが、結極（まま）は今の日本になる。それが私の考えるIFの日本史です。」

このように、学生のレポートは、私が授業で強調したその当時からあった日本人の文化的水準の高さ---識字率の高さや、外来文化に対する好奇心の強さ、探究心や勤勉さなど---について十分に配慮した内容とはなっているが、「結局は今の日本になる」という結論について筆者は納得できない。この学生は、日本がキリスト教国になるとか、市民革命が起こるなどのいわゆる歴史上の「事件」については想像を膨らませているが、いざ社会や文化の本質を考察する段になると、深みが足りないといわざると得ない。このレポートは、仮想の歴史の中で起こる表面的な事件をいくつか予言しただけと評してもよい内容となっている。

まず、私が与えたレポート課題にわざわざ「ユークリッドの『原論』が日本で出版されていたら」と書いているのも関わらず、レポートには「数学」という言葉が一回も登場せず、日本の数学史への言及が全くない。また、日本とヨーロッパのもう少し精

密な文化比較が欲しかった。「結局は今の日本になる」という結論は、現状の日本を肯定する学生の歴史観から強く影響を受けすぎているのかもしれない。キリスト教が広まり、技術がもっと発展したと論じていながら、それが今の日本の文化的土壌にどのような影響を及ぼしたかについての考察は全く足りないと思われる。この結論は説得力に欠ける。

以上、ひとりの学生のレポートについて論じてきたが、結論として言えることは、本学の学生は歴史の授業などで習った個々の事件や政策を知識として利用し、入れ替えるなどの操作をして仮想の歴史を書いて「遊ぶ」能力はもっているが、それを現代社会に結びつけるだけの深い教養、とくに文化的視点は持っていないといえる。

なお、授業で取り上げた参考文献は以下である。

1. 若桑みどり『クアトロ・ラガッツィ　天正少年使節と世界帝国』（集英社、2003 年）
2. 横地清『絵画・彫刻の発展史を数学で嗜もう(2)---数学の文化史』東海大学出版会（2006/09）
3. 遠藤周作『沈黙』新潮文庫(1981/10)

３．今後の課題

授業では、天正遣欧少年使節という歴史上の事件を中心として、西洋の宣教師たちがなぜ日本に布教をしようと考えたか、日本に来た結果、日本の文化についてどんな発見があったか、西洋から持ち込んだ文物にはどのようなものがあったかということを話した。もちろん、それらが現代の日本とどのように結びつき、どのような意義かあるかということはこのテーマの中心である。

仮想の歴史を考えることは楽しいので、まず、その楽しさをより多くの学生に伝えることが大切だと思う。しかし、最終レポートを読む人に説得力のあるレポートにするためには、単に想像上の知的な操作を楽しむだけでなく、深い考察と文化的な視点がなければならない。そのようなものは一朝一夕には到達できないので、今後もチャレンジするに値するテーマであり続けるだろう。

４．教養教育についての提言

本学の一般教養の人気科目に「宗教学」があるためかどうか分らないが、私のテーマに対する学生の小テスト、レポートの答案は宗教に力点を置いて語っているものが非常に多い。多くの学生の回答に同じような記述がみられるのは、「宗教学」で学習した内容を想起して書いているからなのだろう。確かに、文化を考える際、宗教は重要なひとつのファクターであるには違いないが、この授業は、数学がテーマなのだということが学生に伝わらないもどかしさがある。本学の教養教育が次の世代に伝えるひとつのメッセージとして完結するためには、もっと数学について考え、数学を語る文化を大学のキャンパスに醸成する必要がある。数学は単なる計算の道具で終わらせるにはもったいないさまざまな文化的次元を持っている。社会の数学に対する関心が高まっていることに連動して、学生にそのような教養を学ぶ機会を用意することは大学人の義務であろう。

引用文献

1) 滝沢利直・菅田圭次 (2006) 大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究（１）－現代社会における当事者意識の形成－　東京工芸大学工学部紀要 Vol.29. No.2
2) 菅田圭次・小沢一仁 (2006) 大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究（２）－現代社会における当事者意識の形成－　東京工芸大学工学部紀要 Vol.29. No.2
3) 小沢一仁・滝沢利直 (2006) 大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究（３）－現代社会における当事者意識の形成－　東京工芸大学工学部紀要 Vol.29. No.2
4) 神庭重信　こころと体の対話-神経免疫学の世界-、文藝春秋、(1999)
5) 讀賣新聞　運動で脳も体力向上（2005 年 8 月 9 日）
6) 讀賣新聞　安らぎの音 1,2,3（2010 年 4 月 22 日、23 日、24 日）